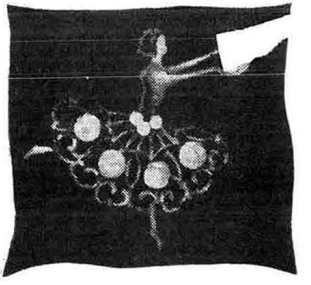
おーい先生
須知徳平

おーい先生

須知徳平



秋元書房

著者紹介

1921年，岩手県，盛岡市生まれ。
盛岡中学を卒業して満州に渡り，のち帰国。
国学院大学をおえ，岩手県及び北海道の中高校教員を歴任後，上京して文筆生活に入る。
昭和37年，本名の佐川茂で「ミルナの座敷」が，第三回講談社児童文学賞入選。
昭和38年，「春来る鬼」で，第一回吉川英治賞入選。その他「青い大きな海」「アツカの斜塔」「人形は見ていた」など，著作多数あり。
現住所　東京都練馬区桜台2ノ43　南桜荘。

おーい先生　　定価 220円

昭和41年1月20日　印刷
昭和41年1月25日　発行

著　者　須知徳平（すち とくへい）
発行者　秋元英子
発行所　株式会社 秋元書房
東京都新宿区赤城下町42番地
電話（268）0758・7637
振替東京 27047

乱丁・落丁のものは，本社またはお買いもとめの書店にてお取りかえします。

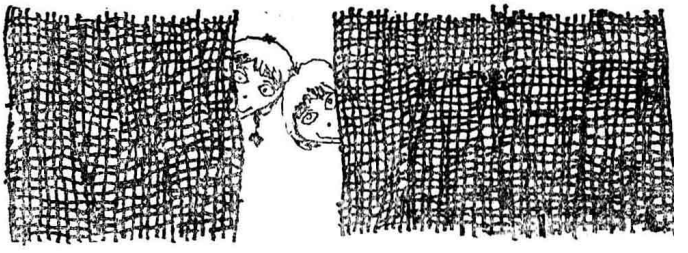
組版・西田整版　印刷・皆川印刷　製本・共成社

1966 Printed in Japan © T. Suchi

目次

あわれ女ごころ　5
男のおせっかい　23
ライラックの花咲く頃　39
ああ青春　53
大雪山の思い出　67
サヨナラだけが……　97
アシナガオジチャンへ　113
再会　128

さしえ　赤坂三好



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おーい先生

主要人物

熊バン――本名熊谷伴治。石狩高校三年A組。熊谷薬局の一人むすこ。サッカー、バレー、スキー、柔道……スポーツならなんでもござれの万能選手だが、勉強の方はさっぱり。

イップ――本名前川一夫。同じく三年A組。学校一の文学青年と自認しているだけあって、何でも知っているインテリ。

ゴン――本名白井権郎。イップ、熊バンとは無二の親友。

佳(よし)っちん――本名岩間佳子(よしこ)。三年A組。オシャレ洋品店の娘だけあって、美人。

お妙(たえ)――本名樋口妙子。三年A組。佳っちんの親友。

薫(かおる)大将――本名荒木田薫(かおり)。札幌の高校から転校してきた都会的な美人。

オジチャン――本名足沢幸助。三年A組の担任で、国語の先生。独身で話せる先生。

あわれ女ごころ

1

石狩川の土手の、川柳の芽も、ようやく、鉛筆の尻っぽのケシゴムほどにふくらんできた。この雪国にも、春が訪れてきたらしい。

そんなある日の朝、配達されたばかりの石狩新聞を手にした町の人々は、おやっと目を見はり、つぎに、にやっと笑った者も多かった。

――舘洞家の愛犬、何者かに撲殺さる。

いくら北海道の、そのまた地方の小新聞だって、こんな記事を三段ぬきの見出しでかかげるとは、よほど暇な時だったのだろう。二週間ばかり前までは、町会議員の選挙で、虚々実々、うんざりするほど、候補者たちの名論卓説を読ませられたばかりだったが……。

記事の内容はこうであった。

石狩町会議員、舘洞堂蔵氏の愛犬ポス（シェパード三才）が、何者かによって撲殺され、高等学校裏の、石狩川の土手のほとりに投げ捨てられていた。犯行は二十二日深夜のことと推定される。当局ではもっか鋭意犯人を捜査中。

同じく、おなじみのチョビ髭の舘洞氏の写真と、同氏の談話がのっていた。

「何のうらみがあったか知らんが、あまりにもかわいそうだ。このままだまってはおられん。犯人だって――わしには心あたりがある。きっと探し出してこらしめてやらなきゃ、わしの胸がおさまらん」

石狩高等学校三年A組の、まだ他にだれもきていない教室で、白井権郎、川上鉄也、前川一夫の三人が、めずらしくきまじめな顔をして、ひそひそ話をしていた。

「きっと、あいつのしわざだ」

「そうだ、あいつにきまっている」

「いや、まだそうはっきりきまったわけじゃない」

「しかし、動機からしても明白だ。佳人の奇遇の一件からみても、まちがいない」

そう、確信ありげに断言しているのは、前川のイップ

である。
「おれもそう思う。わりとあいつ、浪花節的な義侠心の持ち主だからな」
「浪花節だろうがなんだろうが、もしあいつだとすると、痛快なことをやらかしたもんだな」
「そりゃそうだ。今度の事件は、われわれ高校生のためばかりじゃなく、この町のため世のため、大いに祝福してしかるべきものだとおれは思うんだ」
しきりに大げさな気炎をあげているのは、川上のテツである。
「とにかく、熊パンがきたらはっきりたしかめてみよう」
「そう簡単に白状するかな、あいつ、てれやのくせに、あんがいがんこだからな」
「おれたちの仲じゃないか、あいつだけがひとりじめにして、いい子になるって法はない」
長いあごをなでながら、つぶやいているのは白井のゴンである。
「だが、気にかかるな」
「何がだ」
「ホラドウは、わしには心あたりがある、といってるが、あいつ、撲殺の現場に、証拠でも残していったのかな」
「そうだな。あいつ、少しあわてんぼうのところがあるからな、ひょっとすると……」
「まてまて、そうとはかぎらん。いやたとえそうであったとしてもだ。その時はその時のことだ。おれたちがついている」
「そうだ。われわれ高校生のためにも、この町のためにも、あいつの名誉ある行為を無にすることはできん」
「とにかく、あいつがきたら、はっきりたしかめてみよう」
——オス、オス、オハヨウ、アラ、ドウシテサソッテクレナカッタノ……。
ようやく変声期をすぎたばかりの、そうぞうしい男女の声が、どかどか教室に入ってきた。
「あら、あんたたち、めずらしく早くきているのね。どうかしたの？」
三人はいっしょにふり向いた。明らかに緊張した顔つ

きである。
色が少し黒くて、どこか焼きたてのアンパンを思わせる、大がらな、目鼻立ちのはっきりした女生徒である。
「なんでわたしの顔をそんなにじろじろみるのよ、なんかついてるの」
「ううん、あのな佳っちん」
イップが思い切ったようにきいた。
「今朝の石狩新聞をみなかったか」
「あんな赤新聞、うちじゃとってないわ」
「それじゃいいんだ……」
「何かあったの？」
「いや……くる途中で熊バンを見かけなかったか」
「ううん、見なかったわよ」
「あいつ、遅えな」
「何いってるの、あんたたちこそ、たまに早くきたと思って……」
ホーム・ルームのベルが鳴った。熊バンはついに現われない。
担任の教師、オジチャンこと、足沢幸助が出席簿をぶら下げて教室に入ってきた。
オジチャンというから、白髪頭か、少なくとも干するめのように油気のなくなった先生を想像するだろうが、現われたのは長身、黒ぶちめがねをかけた若い先生である。去年の冬東京の学校から赴任してきたとき、男生徒たちは、さっそく、その姓と名から一字ずつとって、タルスケというニックネームを進呈したが、やせっぽちの先生には、あまりうまくない連想だった。その後、女生徒たちはアシナガオジチャンという、いともやさしい呼び名を奉った。男生徒たちは反対したが、衆寡敵せず——この組では、女生徒が男生徒よりも四人多い——ついにそれに落ちつき、二年生から持ち上り、現在にいたっている。
どうも、女というやからは、自分が太くても低くてもおかまいなく、背の高い男性には弱いものらしい。石原裕次郎が、股下——センチあるそうだわ、などと、えげつないことをいってよろこんでいる。いったい、どういう心理なんだろうな——これは、文学青年、前川イップの評言である。

オジチャンは、教壇に上って、その日の第一声をあげた。
「諸君、お早よう。ところで諸君は、今朝の石狩新聞をみたか――」
彼ら三人は、ごくんとつばをのみこんだ。
「実はぼくもいましがた、職員室できいたばかりなんだが、例のホラドウ――いや舘洞家の愛犬ポスに関することであるが……」
オジチャンは、それから、ポス撲殺事件のあらましを語り終わって、
「……そういうわけだ。それで、諸君にききたいのだが、もしも、その撲殺犯人が諸君の中におったなら、いさぎよく申し出てもらいたい」
オジチャンの話のはじめから、教室じゅう、笑い声にうずまいていたが、確実に笑わなかった者が、男生徒に三人、女生徒に一人いた。
「どうだ、心あたりの者はおらんか」
「先生――」
組委員の村上玄二が立上った。
「先生の話によると、ぼくらを疑っているようですが、何か疑う理由でもあるんですか」
――そうだ。そうだ。
――何か証拠でもあるんですか。
男女の声がこもごも、教壇に向かって、一せい射撃をはじめた。
「待て待て、そういうわさがあるんで、いちおうきいてみただけだ」
「うわさとは、どんなうわさですか」
「いやなに……あるいは犯人は、高校生ではないかという町の人々のうわさに、校長が心配しているだけだ。殺人現場も、いや、犬殺しの現場も高校近くだし、死体放棄場所も、学校裏だし、それに、通学禁止路の問題もある。状況はわれわれにとってまことに不利である。しかし、何も確証があってのことではない。さっき職員朝会でそういう話が出たんで、諸君にきいてみただけだ。なければそれでよい」
「先生――」
思いがけない方から声がかかった。彼ら三人は、また

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もやどきんとして顔を見合わせた。さっき笑わなかった女生徒の一人、岩間佳子の佳っちんである。
「なんだね、佳子」
「もし、わたしたち生徒の中に、その犯人がいたとすれば、先生はどうなさるつもりですか」
オジチャンは、めがねの向う側で二、三度まばたきをすると、
「何か……まさか淑女のきみが犯人というわけではなかろうが……それとも、きみは生徒の中に誰かいるとでもいうのかね」
「いいえ、もしもです。仮定です」
いつもの佳っちんらしくない、ひたむきな態度である。
「仮定か——そんな仮定のことには答えられんな。犯人の顔をみて、かつその動機を明白にしてからでなければな」
オジチャンは、大臣の議会答弁か、推理小説に出てくる検事のようなことをいった。
「しかし、そう何も心配することはない。あのポスとやらいう愛犬には、ぼくもたびたびめいわくをこうむって——いや、これは失言だ。死屍にむちうつのはよくないことだな。いくら犬でもな……」
オジチャンのまばたきはますますはげしくなった。
「わかりました。もういいです」
佳っちんは、淑女にあるまじき、ガタンと大きな音を立てて、いすにすわった。
「もうそれでいいのか。それでは、ポス撲殺の件はこれで終わる」
オジチャンはこういって、
「では出席をとる。だれか休んだ者はおらんか」
出席簿を開いて、ぐるっと教室を見まわすと、
「熊谷はまだこんな。もう現われてもいいころだが…」
窓の外をのぞいて、
「休んだのかな……だれか知らんか」
「知りません」
席の近くの二、三人がこたえた。
「熊谷の遅刻にはなれているが、休むとはめずらしいな」

ホーム・ルームは終わった。オジチャンが教室を出ていったあと、

——やっぱりそうだ。

——まちがいない。

——動機は、たしかに、佳人の奇遇の一件からだ。

白井のゴンと、川上のテツと、前川のイップは、顔を見合わせて、それから岩間佳子の方をそっとうかがった。

色が黒くてよくわからないが、たしかに、いつもの佳っちんらしくない。席にすわったきり何か思いつめているような顔だ——。

2

彼らがしきりに気にしている、佳人の奇遇の一件とは、そもそも何であろうか。

石狩高校一の文学青年と自称する前川のイップが、たまたまこう名づけたものだが、さっするに、岩間佳子のことに関した何かにはちがいない。

この一件の説明には、まず、オジチャンもちょっといってたが、通学禁止路、通称ホラドウ小路のことから弁じなくてはならない。

舘洞家の裏門は、石狩高校に通う近道に面している。ところが、そこを通る者は、いつも愛犬ポスに吠えられ、ときにはかみつかれることを覚悟しなければならなかった。学校では、危険だから、ポスをつないでおいてくれ、と舘洞家に申しこんだところ、かえって逆ねじをくわせられた。

『文句をいいたいのは当方である。この道は、もともと舘洞家の屋敷内なのである。今まで黙認していたが、そんなことをいうなら、今後、生徒たちを通らせないでもらいたい。正規の通学路がちゃんとあるではないか』

理屈はたしかにその通りであった。学校ではやむを得ず、ホラドウ小路を、通学禁止路に指定した。しかし、何ごとも理屈どおりにはゆかないものだ。何人かの生徒たちにとっては、始業時刻ギリギリに駈けぬける、どうしても、必要かくべからざる通路であった。

正規の通学路を通ったところで、二分ともちがわないでないか——という者は、高校生の心理をわきまえない

もののいうことで、登校時の朝の二分間が、他の数時間に匹敵するという高等数学を解することができない者どもである。もっとも、そうなるとそれで、レジスタンスの精神から、わざわざスリル感を味わうために通る者もいる。さすがに下級生には少なかった。上級生でも、札つきの遅刻組、例えば、熊バンやゴンやテツやイップたちのもっぱらの愛用路となっていた。

さて、先週の月曜日の朝のことである。

熊バンとイップが、二人連れだって、例のごとく遅刻しそうになり、この近道を駈けていったとき、舘洞家の裏門のあたりで、ポスにかみつかれ、悲鳴をあげているひとりの女生徒に出会った。それが岩間佳子であった。彼女は、この日はじめてこの近道を通り、不幸にもこの奇禍に会ったのである。

それを見た熊バンは、ものすごい勢いでかけつけ、

「コンチクショウ……」

思い切りポスの頭を蹴っとばした。何せ熊バンは、サッカー部の選手である。ポスはしっぽをまいて、裏門の中へ逃げてしまった。

「佳っちん、大丈夫か」

彼女は、青い顔をして、しばらく声も出ないようだったが、無惨にもスカートが二十センチもほころび、その間から白いスリップが顔を出しているのに気づき、今度は真赤になり、次に泣き出しそうな声で、

「どうしよう。これじゃ学校へはゆけないわ」

イップは赤い顔をして、

「佳っちんらしくもなく、なれんことをするからだよ。だまって表通りを通りゃいいのに」

「だって、しょうがなかったのよ。今朝方、急に母のぐあいが悪くなって……」

そのとき、チラチラ横目を使いながらも、熊バンのいったことがよかった。

「しょうがねえ……佳っちん、どっかで早く縫ってしまいな。どうせこれからじゃ遅刻だ。おれたちもいっしょに遅刻してやるからな」

それから、こういい足した。

「針と糸持ってるか」

つごうよく、その日は家庭科の時間があって、裁縫道

具が、カバンの中に入れてあった。
「そこで二人で見はり番をしていてね」
佳っちんは、物かげにしゃがんで、破れたスカートをつくろいはじめた。その間、数分間熊バンとイップは、佳っちんに背を向けて、あほうのごとくつっ立っていた。
「アンチクショウ、今度こんなことをしやがったら、ぶっ殺してやるから……」
そのとき、熊バンは、舘洞家の裏門の方をにらみながら、てれくさそうにつぶやいていたのを、イップがそばできいていた——。
「つまり熊バンは、佳人の奇遇を救わんと、わが身の危険をかえりみず、義侠心を発揮したというわけなんだ」
文学青年前川のイップは、この間文学史の時間に、オジチャンから教わったばかりの、明治時代の政治小説の題名にひっかけて——奇遇という意味はよくわからなかったが、この場合なんとなくふさわしく思えて——いくらか誇張して、さっそくゴンとテツに話したというわけなのである。

3

その日、熊バンはついに学校に現われなかった。遅刻はしょっ中のことだが、体は頑健そのものだし、休むなんてことはほとんどない。それが、今日に限って休むとは……。
「やっぱり犯人はあいつにちがいない」
「ひょっとすると、警察で取り調べられているんじゃないかな」
「そうかもしれん、きっと何かあったんだ」
「とにかくあいつの家にいってみよう。真相をたしかめてみることが第一だ」
放課後、彼ら三人は、熊バンの家である、本町通りの熊谷薬局の店頭にかけつけた。
「こんにちは、熊バン、いますか」
「何だ——お前らか」
彼は、犯人らしくもない大きな声で奥からゆうゆうと現われると、
「ちょうど退屈していたところだ。さあ、あがれ、あが

れ」
緊張してきたのに、どうも調子がちぐはぐである。
とりあえず居間にあがって、
「誰もいないのか」
「そうだ」
「お前、なんで今日学校を休んだんだ」
「札幌のおじきがキトクでな。昨夜遅くあわてて、オヤジとオフクロが出かけたんだ」
「なるほど、それで熊パンがるすバンをしているというわけか」
「ゴン——そんなつまらんしゃれをいっている場合じゃない……休んだのはそれだけの理由か」
「それだけとは何だ」
「つまりその……誰か取り調べにこなかったか」
「取り調べだって……お前ら、何をいいにきたんだ」
やはり調子が変である。
「テツ——おれがきく。率直にいうけど、お前、今朝の石狩新聞をみたか」
「あんな赤新聞、おれはみたことなんかない」
「家ではとってるか」
「さあ、あるかもしれん、店頭にほっぽってあるだろう。何かあったのか……」
イップが店頭をさがしにいって、
「あった、あった。これだ。熊パン、読んでおどろくな」
「なんだ、こりゃ……」
ひろげて読み出した熊パンは、突然大声で笑い出し、
「こりゃ愉快だ。あの犬がやられたか、いい気味だな」
ますます調子が変である。
「笑いごとじゃないぞ、いいか——お前がその犯人だということになっているのだ」
「何だって——」
熊パンは、目をパチクリして、
「どういうわけだ、そりゃ……」
「つまり、いろいろの状況から判断してだ」
「そうだ。この間の、佳人の奇遇の一件からしても、動機は明白だ。何も悪いことじゃない。やったらやったといえ、かくすな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com